

台湾派遣研修による商業科教育の充実と生徒への学びの還元

千葉県立千葉商業高等学校 教諭 大塚 くるみ

1 派遣事業の概要と目的

本派遣事業は、海外における商業・産業・地域創生の実態を直接体験することを通して、生徒の国際的視野を広げるとともに、商業科で学習している内容が実社会でどのように活用されているかを理解させ、主体的な学習意欲および進路意識の向上を図ることを目的として実施されたものである。

近年、社会や経済のグローバル化が急速に進展する中で、商業科においても、国境を越えた経済活動や地域間競争を視野に入れた学びが求められている。本派遣事業は、こうした時代の要請に応えるものであり、生徒にとって教室内の学習だけでは得ることが難しい、実践的かつ体験的な学習機会となった。

また、本事業は県内複数校の商業科生徒が合同で参加する形式で実施されており、学校の枠を越えた交流を通して、多様な価値観や考え方に触れる機会を創出することも大きな意味があった。



【写真① 台湾の街並み】



【写真② 現地到着時の様子】

2 研修内容と学習の様子

(1) 第1日目 台湾到着・現地環境への適応

派遣初日は、日本を出発し台湾へ渡航した。参加生徒の多くにとって初めての海外渡航であり、出発前は緊張した様子も見られたが、現地到着後は徐々に落ち着きを取り戻し、周囲の状況を観察する姿が見られるようになった。

移動中や現地の街並みを目にする中で、日本とは異なる建物の構造や交通事情、看板表示などに関心を示し、生徒同士で気づいた点を共有する様子が見られた。これらは、異文化に触れる最初の体験として、生徒にとって大きな刺激となった。

(2) 第2日目 学校交流および商業・産業に関する研修

2日目の午前中は、私立育達高級中等学校を訪問し、校内施設の見学および現地生徒との交流を行った。授業施設や校内設備を見学する中で、日本の高等学校との共通点や相違点に気づく場面が多く見られ、生徒は興味深そうに説明を聞いていた。

交流の時間では、千葉県から参加した生徒が、各自の学校について英語を用いて紹介を行った。事前に準備した内容をもとに、学校生活や学習内容、部活動などについて説明し、限られた英語表現の中でも伝えようと工夫する姿が印象的であった。実際に英語を使って伝える経験を通して、生徒は語学学習の重要性を実感するとともに、国際的なコミュニケーションへの意欲を高めていた。

午後は、台湾にある複合型観光施設である X-Park を訪問し、日本人駐在員の方から講義を受けた。講義では、施設運営の仕組みや集客の工夫、観光施設としてどのように収益を確保しているのかといった点について、具体的な事例を交えて説明が行われた。

生徒は、単に施設を見学するだけでなく、「どのような仕組みで利益が生まれているのか」「来場者を増やすための工夫は何か」といった視点で話を聞いており、商業科で学習している内容と結び付けながら理解を深めていた。

	
【写真③ 育達高級中等学校での交流の様子】	【写真④ X-Park での講義の様子】

(3) 第3日目 地域創生・企業訪問を通じた学び

3日目の午前中は企業訪問の一環として、金山漫遊へ伺い、地域創生講座を受講した。講座では、地域資源を活用しながら観光や交流を促進する取組について説明が行われ、日本の地方創生と共通する課題や工夫点が多く見られた。

講座後の班別協議では、「地域に人を呼び込むための企画」をテーマに意見交換を行った。生徒からは、

- ・地域を舞台とした結婚式を行うプラン
 - ・1日ツアーとして温泉や体験学習（竹とんぼ作り、帽子作り、芋スイーツ作り）を組み込む案
 - ・世界に一つだけの芋ハンコ作りを通じた体験型観光の案
- など、高校生ならではの新鮮で柔軟性に富んだ提案が数多く出された。

これらの案には、単なる観光ではなく「体験」や「思い出」を価値として提供しようとする視点が見られ、生徒が地域創生を自分事として捉えて考えている様子がうかがえた。

午後は、台湾のプロ野球球団である楽天モンキーズを訪問し、球団関係者から講義を受けた。講義では、台湾における野球の知名度やファン層、チケット収入・グッズ販売・スポンサー契約など、球団運営における収益構造について説明がなされた。

生徒は、日本のプロ野球と比較しながら話を聞き、スポーツを通じたビジネスの在り方や、エンターテインメント産業としての側面について理解を深めていた。

夜には、台湾有数の観光地である士林夜市を訪れ、実際の観光の様子を見学した。多くの観光客で賑わう夜市の様子から、商品構成や価格設定、呼び込みの工夫などを観察し、観光と商業が密接に結び付いていることを実感する機会となった。

	
【写真⑤ 金山漫遊での講座の様子】	【写真⑥ 楽天モンキーズでの講義】

(4) 第4日目 歴史・流通の学習と帰国

最終日は、中正紀念堂を訪問し、台湾の歴史について学んだ。施設内の展示や説明を通して、台湾の近代史や社会背景について理解を深め、文化や歴史を踏まえた上で現在の台湾を捉える重要性を学ぶ機会となった。

その後、台湾における代表的な大型小売店であるカルフルを訪問し、商品の種類や陳列方法、在庫の並び方などを見学した。生徒は、日本のスーパーマーケットと比較しながら、売り場構成や商品展開の違いに注目して観察していた。

この見学を通して、生徒は流通や販売の工夫が国や地域によって異なることを理解し、商業科で学ぶ流通分野の学習内容を実社会と結び付けて捉えることができた。



【写真⑦ 中正紀念堂の見学】



【写真⑧ カルフルでの商品見学】

3 成果の還元と今後の展望

本派遣事業を通して、生徒は異文化の中で主体的に行動し、自ら考え、学びを深める力を身に付けることができた。初めての海外渡航という不安のある状況の中でも、日程が進むにつれて周囲の状況を的確に捉え、仲間と協力しながら行動する姿が多く見られるようになり、生徒一人一人の成長を実感することができた。

特に、学校間交流や企業・地域訪問においては、台湾で活動されている方々の姿勢が、生徒に強い印象を与えていた。現地の学校関係者、企業関係者、地域創生に携わる方々はいずれも、自らの役割に誇りを持ち、高いプロ意識をもって活動されており、その根底には「台湾を大切にし、より良くしていこうとする思い」が一貫して感じられた。

生徒は、単に知識や情報を得るだけでなく、そうした姿勢や心構えに触れることで、「自分の地域や所属する学校をどのように捉え、どのように関わっていくべきか」を考える機会を得た。地域創生に関する研修や班別協議において、高校生らしい柔軟な発想が多く見られた背景には、現地の方々の真摯な取組から受けた影響が大きいものと考えられる。

また、他校生徒との交流を通して、多様な価値観や考え方に触れたことは、生徒の視野を広げるとともに、自身の考えを客観的に見つめ直すきっかけとなった。こうした経験は、将来の進路選択や学習への意欲向上にもつながる重要な成果である。

引率教員として本派遣事業に参加し、教室内の学習では得ることが難しい「実社会と向き合う姿勢」を生徒が体感的に学んでいく様子を間近で見ることができたことは、大きな意義があったと感じている。商業科で学ぶ知識や技能は、単なる技術ではなく、地域や社会を支える人々の思いと結び付いて初めて価値を持つものであることを、生徒自身が理解し始めている様子が見えてきた。

今後は、本派遣事業で得られた学びや気づきを、校内での報告や授業において他の生徒と共有し、商業科教育のさらなる充実につなげていきたい。特に、地域や企業、人との関わりにおいて求められる心構えや姿勢についても重視し、生徒が自らの学びを将来の進路や社会参画へと結び付けていけるよう指導していく必要がある。